

米国の障害児教育体制の現状から見たわが国の 特別支援教育の在り方についての一考察

篠崎 久五・佐方 佳広¹・河田 将一

I 問題と目的

義務教育学校および特殊教育諸学校においては、「特別支援教育」が2007（平成19）年度に完全実施となり、各学校に特別支援教育コーディネーターが配置され、校内委員会が設置されるなど、障害のある児童生徒一人一人の特別な教育的ニーズへの対応が推進されている。

その中で、とくに軽度発達障害の児童生徒に対する教育支援体制については、文部科学省が平成16（2004）年にガイドラインを示すなど、支援体制整備が急速に行われている。

加えて、「発達障害者支援法」が平成17（2005）年4月より施行され、発達障害のある人々を乳幼児期から生涯に亘って支援することが示され、学齢期については、教育機関の役割が支柱となった支援体制の整備が求められるようになった。

一方、知的障害のある児童生徒（以下、知的障害児）は、通常学級、特別支援学級、養護学校等のさまざまな場で教育を受けているが、健常児と共に学ぶ通常学級に籍を置くケースが年々増加してきている。近年のインクルージョンの理念の影響をうけて、国も「障害児も健常児の中で教育を受けるべきである」と就学指導の緩和を示しており、今後その数はますます増加することが予想される（文部科学省、2002）。

現在、わが国の通常学級が抱える問題は増加の傾向にある。学校における問題として、海老坂（1997）は、クラスの定員が多いことと教師の時間的なゆとりの少なさなどを訴えている。現に障害のある児童生徒（以下、障害児）の在籍の有無にかかわらず、多くの小中学校において、複数の支援者による支援が必要であり、支援の手が足りない現状がある。

セリコウィッツ（2000）は、本来、教師たちは児童生徒と1対1の個別支援を基本に援助できる時間を見つけられるようにすべきで、そうした時間が利用できなければ、あるいはこの方法で十分に援助することができなければ、似たような支援ができる方法を探ることが大切であると指摘する。

このことについて、熊本県では、緊急地域雇用対策関連予算のひとつとして、1億1千万円を費やし、平成13年度（2001）4月から「フレッシュキッズモデル事業」を開始した。小学校第1学年の在籍36人以上の学級に非常勤職員を配置し、ティームティーチング（Team Teaching）を実施して、「きめ細やかな指導を行い、児童の個性を生かす学校教育を展開する」ことが趣旨で、該当学級数が1～2の学校には1人、3～4の学級には2人、5以上の学校には3人を配置することとしている。職務は、児童の集団生活への適応指導や学習指導の補助を行う、児童との人間関係を醸成し、信頼と安らぎのある学級経営の補助を行う、その他校長が必要と認める業務を行う

となっている。資格は特に規定しておらず、勤務時間は6か月を超えない任用とし、1週間につき月曜から金曜までの5日間で14時間が原則となっている（熊本県、2001）。

また、障害児が在籍する小中学校の支援体制も徐々に整備されはじめている。熊本市教育センターが、いじめ、不登校、学級不適応等で悩む児童生徒や、保護者及び学校教育関係者等の相談に応じ問題解決の援助にあたることを目的とした「スクールアドバイザー派遣事業」を行っている。その形態としては①訪問相談、と②訪問支援がある。①においては、「巡回訪問相談」「要請訪問相談」「定期訪問相談」に区分され、「巡回訪問相談」では、年度当初に、小、中学校を巡回して訪問する。「要請訪問相談」では、当該学校の要請があった場合、相談員を派遣し相談にあたる。「定期訪問相談（小学校のみ）」では、年間、学期単位で週1回、曜日、時間を設定して、訪問相談を行う。②においては、特に指導が困難な特別支援学級、身辺処理や移動に援助が必要な特別支援学級、LD、ADHD等の軽度発達障害により個別的な指導を必要とする学級等に、1日6時間以内、原則として週2回を限度として行われる（熊本市教育センター、2001）。

加えて、「学級支援員」という「教員免許を持った者」に限定して支援者を公募し、小中学校の通常学級に補助教員的に配置を始めた（熊本市教育委員会、2006）。

さらに、学生ボランティアによる小中学校通常学級における補助教員の支援も全国各地で展開され始めた（長尾、2003；松見・道城、2004；柘植、2005；河田・森・一門・緒方、2005）。

一方、アメリカの場合、公立学校での障害児教育がいろいろな意味で充実してきたのは、1975年に全障害児教育法（P L 94-142）が制定されてからのことである。この法律の制定により、「最も適した教育」を「いちばん拘束の少ない環境」において「無料」で提供することが公教育の義務となった（河田、1998）。それから四半世紀経った今日、アメリカの公立学校の中では、障害児に対応するためのサービスがさまざまな形態で定着してきている。アセスメントのためのツールや支援技法も数多く開発され、学校、家庭、外部の専門家や機関などの連携も容易に行われるようになってきている（バーンズ・亀山静子、2002）。また、公法により障害児教育のサービスが22歳まで受けられる仕組みになっている。その結果、小中学校はもとより高校においてもリソースルームや特別支援学級が設置され、障害児や特別な配慮が必要な児童生徒へのサポートが多様な形態で行われている。

柘植ら（1998）は、カリフォルニア州、南カリフォルニア地区の中学校・高校の校長、通常学級の教師、リソースルームの教師、それに特殊学級の教師に対して、LD等の軽度発達障害児への対応についての質問紙法による調査を行った。それによると、ある高校の学習障害のある生徒の半数近くがコミュニティカレッジ（Community College）等へ進学し、他の大学（University）へ進学している生徒もいることが分かった。このことは、軽度発達障害のある児童生徒学生に対する特別なサポートが法的に保証され、アセスメントから個別の教育計画の作成、そして豊富なサービスまでもが、生涯に亘って組織的に構築され実践されていることを裏付けるものである。

以上のことを踏まえて、本研究では、米国の障害児教育について筆者（佐方）が視察を行った資料に基づいて、わが国の特別支援教育の在り方について考察を加えたい。

Ⅱ 方法

America Washington BuckleyにあるFoothills Elementary School, White River Junior High

School, White River High School (Psychology Classes) で通常学級や特別支援学級の授業の視察参観をとおして、それぞれの学校の主要な支援の様子をまとめることで、米国の障害児教育体制の現状を明らかにし、平成19年度から完全実施となるわが国の特別支援教育の在り方について考察を加える。

Ⅲ 結果

視察参観をした学校ごとの支援状況について整理し、支援者の幼児児童生徒への主要な支援内容について記述する。

1. Foothills Elementary School (特別支援学級)

(1) 訪問学級

Foothills Elementary SchoolのLighthouse (特別支援学級)

(2) 児童数

男児12名、女児2名、計14名である。

内訳は、6年男児1名、5年男児1名、4年男児1名、4年女児2名、3年男児1名、2年男児2名、年長男児6名である。

(3) 支援者

教師(女性)2名が支援に当たっており、その他、ボランティアの教師や保護者2~3名が支援に入っている。

(4) 1日の流れ

1日の流れについてTable 1に示す。

Table 1 Foothills Elementary School (特別支援学級) の1日の流れ

時間	活動	活動内容
朝	登校	基本的に全児童スクールバスで登校 Lighthouseの児童は、専用のスクールバスで登校する
8:30	朝の会	朝食、自由遊び、宿題や連絡帳やプリントの提出など (午前と同じ建物内の幼稚園男児6人程が活動に参加する)
9:00	活動1	全体活動1 (高学年の児童は個別活動や通常のクラスに行く)
10:30	活動2	個別活動1
11:30	昼食	クラスで昼食をとる (幼児は昼食後スクールバスで帰る)
12:00	昼休み	屋外で遊ぶ
13:00	活動3	個別活動2
14:45	活動4	自由活動時間
15:15	下校	帰りの会后、専用スクールバスで下校する

(5) 支援の様子

以下、小学2年男児(以下、A児)の活動の様子を中心に記す。

1) 対象児：A児（小学2年男児、知的障害）

2) 支援の実際

① 全体活動

Lighthouseの4年女児1名、2年男児1名、年長男児6名と一緒に活動する。朝の挨拶と名前呼びなどは、1人ずつ前に出てきて、自分の名前のカードや写真などをボードに貼ったり、今日の昼食についてのカード貼りなどをする。質問形式で全員に今日の日付、曜日などを聞きボードに貼っていく。歌を歌ったり、手遊びなどを使って数、月、曜日、色などの学習をする。全員で小さな円になり、数の歌を歌いながら体を動かしたり、体操をしたりする。全員で本読みをして、そのページ、ページに問いかけてある問題に答えていく。本を読むことが難しい児童や質問に答えることができない（言葉が出ない）児童は、VOCAなどの教材スイッチなどを押すなどして参加するようにしていた。また、隣席の児童にちょっかいを出したり、離席をするなど、この活動中長時間座る事ができない児童には、ソフトゴムボールの上に座ってもらうようにしていた。このソフトゴムボールに座っていた幼児は、普通に座っている時よりも集中でき、教師の顔を見て話を聞くなどの行動がみられた。

② 個別活動1

晴れた日は、屋外で体を動かしたり、遊んだりする時間がとってある。雨天や別の活動（図画工作などの活動）が決まっているときは中止となる。また、週に何度か清掃活動として教室の他に図書館の掃除などをする。

A児の場合、個別学習としてその日に決められた勉強をする。課題のノルマはあるが、どれから勉強するかは自由である。

- (a) 本読み：声が出せなくはないが、話せる言葉が少ないためVOCAを使って質問や答えなどのやりとりを行ったり、ページをめくらせたりする。その日読む本は、子どもたちが選ぶようにしてあった。
- (b) 数と色の学習：1～10までの数が書いてあり、書かれた数と同じだけの穴と色の指定されたボードに指示された色と数のピンを挿していく。数を数えるときも声に出して勉強したり、手を使っての数の歌（手遊びみたいなもの）をする。
- (c) 担任との個別学習：その日の提出した宿題のチェックや、今日の勉強のチェック、ノルマの確認、決定などした後、書き取りの勉強をする。午前のノルマの勉強が終わり余った時間は自由学習時間として好きな課題を選んで勉強する。A児の場合、自由学習時間はほとんどパソコン教材を使った課題学習を行っていた。

③ 昼食

食堂に移動しクラスのみみんなと一緒に食べる。昼食は家から弁当を持ってくるか給食の2種類あるメニューから選ぶ（朝の会の時に確認する）。食べ終わったグループ（学級）からかたづける。

④ 昼休み

昼休みはほとんどの子どもが屋外に出て遊ぶ。雨の日も屋外で遊べるようになっている。A児も昼休みは屋外で遊ぶ。はじめはボールで遊んだり縄跳びで遊んだり1人で遊んでいるが、途中で同学年の子どもたちが遊んでいる遊び（鬼ごっこやボール当てなど）に加わり遊ぶ。ルールは理解していないようで、鬼ごっこの時は終始鬼の役をして、みんなが声を出して逃げ回るのを楽しんでいた。終わりのチャイムが鳴っても、なかなか終わることができず、

度々教師に注意される事があった。

⑤ 個別活動 2

午後の活動も基本的にはLighthouseで行うが音楽や国語（本読みや書き取り）を通常のクラスで勉強することができ、参加するかしないかは選択することができる。A児の場合音楽の授業はほとんど参加していた。国語の授業（プリントの絵で物語を作る）に参加していて、途中で授業をぬけるのも自由だった。その場合はLighthouseに戻りそこで勉強を行っていた。Lighthouseに戻ってからは、午前とは違った課題を行っていた。また、午前と同じく担任との1対1の時間もとってあり課題を行っていた。すべての課題が終わると自由課題として、パソコン課題の勉強を行っていた。

A児の課題として、まずアルファベット勉強を行っていた。自分の名前の3文字程度しか書けない。また、色の勉強として書かれている文字（赤とか青など）の枠の中を指示された色で塗っていくものや、形の勉強で、その形（三角形や四角など）を違う色で何度もなぞり、最後にその線に沿ってはさみで切り抜くようなものや、本読み、書き方、パズル、パソコンなどを行っていた。

⑥ 自由活動

その日の課題のノルマがすべて終わった児童は、自由活動として大型ブロックやパズルやゲームなどの遊具を使って遊ぶことができる。この時間は好きな事をして過ごすことができ、絵を描いたりして過ごす児童もいる。

⑦ 下校

簡単な帰りの会（点呼、今日の確認など）をする。通常学級に行っていた児童も戻ってきて参加する。その後、専用のスクールバスで下校する。

⑧ その他

沢山の教材が使われていた。児童がいつでも使えるように、パソコンは5台置いてある（Lighthouseのみ）。時間を決めて何かするときには、タイマーをよく使っていた（例：苦手な勉強であってもタイマーのベルが鳴るまで取り組む。反対に、好きな遊びの時間であってもベルが鳴ったらやめて、別の活動に移るなど）。教室にはベッドが置いてあった。教師たちは常にトランシーバーを持っていて、離れている教師たちといつでも連絡が取れるようになっていた。

2. Foothills Elementary School（通常学級）

(1) 訪問学級

Foothills Elementary Schoolの4年生通常学級

(2) 児童数

男児13名、女児12名、計25名。

その内 Lighthouse（特別支援学級）の児童が男児1人、女児1人加わっている。

(3) 支援者

基本的には教師1名（女性）、隣の学習スペースに教師1名（男性）。

その他、算数専門の教師や保護者1～2名が支援に入っている。

(4) 1日の流れ

1日の流れについてTable 2に示す。なお、1週間のスケジュールは帯状時間割となっている。

Table 2 Foothills Elementary School (通常学級) の1日の流れ

時間	活動	活動内容
朝	登校	基本的にスクールバスで登校、朝の会など
8:30	授業	国語、算数、理科、音楽、図工など
10:00	中休み	屋外で遊んだり、図書館に行ったりする
10:20	授業	国語、算数、理科、音楽、図工など
11:30	昼食	食堂に移動後クラスごとに昼食をとる
12:00	昼休み	屋外で遊ぶ
12:40	授業	国語、算数、理科、音楽、図工など
15:00	帰りの会	帰りの会、連絡など
15:15	下校	スクールバスで下校する

(5) 支援の様子

以下、小学4年男児（以下、B児）小学4年女児（以下、C児）の活動の様子を中心に記す。

1) 対象児：B児（小学4年男児）、C児（小学4年女児）

2) 支援の実際

対象児のB児、C児共にLighthouseに通っているが、基本的には通常学級の児童と一緒に学習し、必要に応じてLighthouseに取り出して支援を行っている。

① 登校から朝の活動

専用のスクールバスで登校した後は通常学級に行かず、Lighthouseで朝の会をする。朝の会では、出欠、朝の連絡などの他に、今日クラスで受ける授業とLighthouseで受ける授業の確認などを行う。

朝の会が終わると授業が始まるが、B児は週に1度リサイクル活動として、リサイクルできる紙くずの入ったボックスを回収する活動を行っている。学校の全学級に置かれているダストボックスを、同じLighthouseに籍を置いている5年男児と2名で回収していく。

② 授業と休み時間

通常学級で他児と一緒に国語、算数、理科、音楽、図工などの授業を受ける。休み時間は皆、屋外に出て鬼ごっこやボールなどを使って遊ぶ。

(a) B児の場合

国語の授業では、教室に置いてある本を読んだりする時間がある。教師が支援しているときは、簡単な本と一緒に読み、その話の一場面が描かれた塗り絵をしたり、本に出てきた単語について段階を変えてあるプリントを用いて、点線で書かれた文字の上をなぞり、文字の少ない単語から、徐々に文字が多い単語へとスモールステップによる課題を行っている。教師がついていない時は、クラスメイトの一人と一緒に本を読む（ペアになった児童が読んで聞かせる）。また、算数の授業では、隣の学習スペースに移動し、教師と1桁の足し算の書かれたプリントを行う。2桁の問題も書かれているが、殆ど不正解であった。理科の時間は殆どLighthouseに行き、その日の課題（特に単語やパソコンの教材）の勉強を教師と行っていた。また、その時間の最後にアルファベット1文字書かれたカードを1枚ずつ見せ、読みを答える課題をゲーム感覚で楽しんで行っていた。音楽と図工は通常学

級で楽しく行っているが、途中で教室を離れることがあり、その時はLighthouseに行き別の課題の勉強を行っていた。休み時間は屋外に出て遊ぶ。通常学級の他児たちは鬼ごっこをするが、B児はうまく走ることが出来ず、すぐに鬼役の子に捕まってしまう。また、ルールも少し複雑になっていた。教師も全体を見回るため2、3人いるが、B児は1人でフリスビーなどをして遊んでいた。フリスビーで遊んでいる時、自分なりのルールみたいなものを作って遊んでいた。

(b) C児の場合

B児と同じクラスに在籍し、授業は殆ど通常学級で受ける。また、Lighthouseでの学習の時だけ1対1で教師がついていた。算数の時間は、隣の学習スペースで個別に授業を受けていた。1桁のかけ算を習っていたが、1問にかかる時間が長く、答えを書いたり、消したりの繰り返しのため殆ど進まなかった。国語の時間は、簡単な本を読んだり、個別に課題が与えられたノート書き（単語や文章書き）などを行っていた。休み時間は、一人教室に残りノートに絵や文字などを書いて過ごしていた。また、午前中授業を受けずLighthouseに設置してあるベッドで過ごすことが何度かあった。

③ 帰りの会から下校

B児、C児共に帰りの会は、Lighthouseで受ける。帰りの会では、その日の課題の確認、宿題があった場合その確認、連絡等など、その後は自由。B児はブロックなどで遊び、C児はノートに絵を描いたりして時間が来るまで過ごす。下校後、専用のスクールバスで帰る。

④ その他

通常学級でB児、C児に授業で使用するプリントなどは、他児に配られるプリントとは別に個別に用意してあった。たとえば算数などの授業では、授業が始まってから隣の学習スペースとの出入りが自由となっていた。Lighthouseの児童に限らず、児童は、その授業についていけない場合、教師に一言言って教室を出る。教室を出ると広い学習スペースがとってあった。その学習スペースには大きな円机が5、6個ぐらい置いてあり、そこで勉強する。また、6つの教室のドアすべてが学習スペース側に作ってあり、どの教室からもすぐに移動できるようになっていた。その学習スペースには、専門の教師がおり、児童一人ひとりに合わせた学習支援が行われていた。その為Lighthouseの児童の他に同じクラスや違うクラスの通常学級の児童もここで学習を行っていた（算数の授業の時などは5、6名）。

学習スペースには、パソコンが5台ほど置いてあり、いつでも検索などに使えるようにしてあり、児童達もよく使っていた。B児には、ほぼ毎日1対1で学習支援するボランティア教師がついていた。また、1日に1回は必ずLighthouseで1時間程度専門教師による学習支援の時間がとられていた。通常学級の保護者もボランティアとして参加していた。

3. White River Junior High School

(1) 訪問学級

White River Junior High Schoolの特別支援学級

(2) 生徒数

男児4名、女児1名の計5名で、内訳は、2年男児1名、2年女児1名、1年男児3名である。

(3) 支援者

男性教師1名、女性教師2名、ボランティアの教師1～2名、3年男児を担当するボランティアの学生1名

(4) 1日の流れ

1日の流れについてTable 3に示す。なお、1週間のスケジュールは帯状時間割となっている。

Table 3 White River Junior High School (特別支援学級) の1日の流れ

時間	活動	活動内容
8:25	登校	専用のスクールバスで登校、朝の会など。
8:50	授業	決められた課題をする。(国語や算数など)
10:20	中休み	自由に過ごす。(このクラスではおやつがある)
10:30	授業	決められた課題をする。(国語や算数など)
12:00	昼食	食堂に移動後クラスごとに昼食をとる。
12:30	昼休み	屋外や図書室や教室で自由に過ごす。
12:50	活動	奉仕的活動をする。(リサイクルや清掃など)
13:40	授業	決められた課題をする。(国語や算数など)
15:25	下校	帰りの会后、専用のスクールバスで下校する。

(5) 支援の様子

以下、中学2年男児(以下、D児) 中学1年男児(以下、E児)の活動の様子を中心に記す。

1) 対象児 D児(2年女子)、E児(1年男子)

2) 支援の実際

① 登校から朝の活動

専用のスクールバスで登校した後は通常学級には行かず、特別支援学級で朝の会をする。朝の会では、出欠、朝の連絡などの他に、今日行う課題の確認などをする。朝の会が終わると授業が始まるが、1人(2年男子)以外は、そのまま特別支援学級で受ける。

② 授業と休み時間

D児以外は、国語、算数、理科、音楽、図工などの授業を受ける。休み時間は、屋外に出てボールなどを使って遊んだり、教室で過ごす。

(a) D児の場合

D児は個別の課題を行う。特別支援学級には、専属の教師が3人配置されており、その中の誰か1人が、1対1で支援を行っていた(授業の時間以外も教師の誰かが支援をしている)。言葉は喃語レベルで、コミュニケーションをとるのが困難なため、写真を交えた絵カードを用いて、課題を行ったり、コミュニケーションを図っていた。持ち運びできるA3サイズのボードに、絵カードがマジックテープで15枚程度貼ってあった。また、貼ってある絵カードは、状況によって少しずつ変えられていた。絵カードには、生活に関連したもの(カバン、衣類、帽子、弁当などの「D児の持ち物」の絵カード。食べ物が欲しい、飲み物が欲しい、トイレに行きたいなどの「意思表示」の絵カード)と課題活動(ブロック数種類、パズル数種類、ビーズ、チェーン、ピン、洗濯ばさみ、ボールなどの絵カード)

などがあつた。課題の時間は、基本的にD児に絵カードの中から自由に選ばせ、選んだ課題を行うが、パズルやブロックの課題ばかりになってしまう。その為、あまりやりたがらない課題（ピンやビーズ）を2、3個取り出し、その中から選ばせるなどの工夫を行っていた。

ここで、D児の課題の内容例を以下に記す。

ブロック課題は数種類あり、円、三角、四角などの型はめから、それに色の指定があるもの、大きさを比べるもの、数を数えていくものなどがあつた。D児は特に好んでこの課題を行っていたが、形は合わせる事が出来るが、形と色を合わせる課題となると難しかった。パズル課題もピースの数が少なく大きい物から、少し複雑になっている物まであつた。パズルも好んで行っていたが、複雑な物になると、教師が近くまでピースを持っていくなどの支援が必要だった。ビーズ課題は、数種類ある色のビーズ（大きめのリング）を見本と同じ色の順番で通していくもので、あまり好んで行おうとはしなかった。チェーン課題は、プラスチックの輪を支援者がチェーンの様につなぎ合わせ、それをD児がはずしていくものであつた。チェーンは一定の方向に動かさなければはずれないようになっていたが、D児は力任せに行っていたため壊れることもあつた。ピン課題は、1～10までの数字の書かれたボードに、指定された数の分だけピンを挿していく。ボードには指定された数の穴しか開いていないため、多く挿すことはなかった。洗濯ばさみ課題は、赤、青、黄の三色の洗濯ばさみがランダムに木のような物にぶら下がっており、それを1つずつはずし、指定された同じ色の箱に分けていく。この課題は他の課題に比べ集中して行っていた。ボール課題は、バスケットボールを用いて支援者とボールのやりとりを行う。5～10mぐらいの距離をとり、転がしたり、ワンバウンドしたボールのやりとりを行つたが、ノーバウンドのボールを捕るのは難しかった。また、D児が教師に投げることは無かつた。休み時間の過ごし方としては、教室で過ごすか、屋外のベンチで日向ぼっこなどをして過ごしていた。

(b) E児の場合

授業は、殆ど特別支援学級で行われていた。E児を含め同じ学年の3人の生徒と1人の教師の形態で行われていた。授業は同じ教科を行うが、内容は個々に違い、その生徒のレベルに合わせた個別支援が行われていた。国語の授業では、E児に合わせた本を読んだり、単語の書き取りの課題などを行っていた。また、午後からの授業の時、同じ学校の3年男子生徒が週に何度か1時間程度のリソース支援に来ていた。その時は、課題作文の支援などを行っていた。その日のテーマ（例：週末の過ごし方など）について書いていたが、E児は1行ぐらい書いたところで止まってしまう、数分間考えた後、隣の席の生徒に手を出したり、ノートの端に落書きなどを始めた。教師が「この後どうしましたか？このときどう思いましたか？など」問いかけるなど、やりとりを行つた後、その事について書き出した。何度も書いたり、消したりを繰り返した後に提出し、その後、文法、スペルのチェックなどを行い、間違いを書き直したり、反復練習をして残りの時間を過ごした。算数の授業では、簡単な足し算、引き算の他に、お金（コインは本物、札はおもちゃ）を使い計算の学習を行っていた。時折、実際に学校の売店で昼食やおかしなどを買うことがあり、お金で実物を買うことが出来ると知っているが、そのお金の価値（コインと札、例：100セントと1ドルは同じなど）はあまり理解していなかつた。昼からは、同じ学年のクラスに

入り国語や音楽の授業を受け、プリントなども別に用意してあった。休み時間の過ごし方としては、屋外に出てクラスの友達とボールで遊んだり、教室で過ごす。

昼食は、食堂に移動後、クラスごとにとる。食堂では持ってきた弁当や2、3件ある売店や学生食堂などで買って食べる。昼休みは、屋外や教室で過ごす。

昼からの活動としてリサイクルや清掃などを行っていた。リサイクル用の紙が入ったボックスを集めて回ったり、パソコンを使って、授業などで使われたフロッピーディスクのデータを消していく作業や教室以外の部屋や屋外の清掃を行っていた。

帰りの会では、その日の課題の確認、宿題があった場合その確認、連絡するなど、その後は自由行動の時間が設けられていた。下校後、専用のスクールバスで帰宅した。

また、このクラスでは、中休みの時にチョコレート、クッキーなどのおやつを食べていた。授業で使うホワイトボードの隣に、E児を含め1年男児3人の名前がボードに書いてあった。ボードは真ん中から線で仕切られており、右側にきちんと課題を行ったり、何か良いことした時などに「星マーク」が付けられ、その星マークがいくつか貯まると、ご褒美としておやつの時などに、チョコレートなどが貰えた。反対側にはきちんと課題に取り組まなかったり、約束事を守らなかった時などにチェックマークが付けられ、5個貯まると、大きなチェックマークが付けられ、教室の端にある机に座らなければならなかった。その机は周りに壁みたいな物が作られており、時間が来るまでそこに座ってなければならぬ。その机では授業中であっても、その時間は何もせず、ただ座っていなければならなかった。また、時間を決めて課題を行うときは、タイマーを使っていた。このクラスの教師はいつでも連絡が取れるように、トランシーバーを常に持っていた。ボランティアで支援に来ている保護者は殆ど見なかった。

4. White River High School

(1) 訪問学級

White River High SchoolのPsychology Classes (障害児と他の生徒との共同授業「心理学」)

(2) 特別支援学級の生徒数

男子7名、女子2名の計9名で、内訳は、3年男子3名、2年男子2名、2年女子2名、1年男子2名である。

(3) 支援者

女性教師1名、ボランティアの教師1～2名、ボランティアの保護者1～2名

(4) Psychology Classesの授業を受けている生徒

2年のクラスは、男子17名、女子19名の計36名、3年のクラスは、男子15名、女子20名の計35名

(5) 支援の様子

ここでは、Psychology Classesに参加している知的障害のF児、G児について記す。

1) 対象児：F児（2年男児）、G児（3年男児）

2) 支援の実際

(a) 2年生クラス

このクラスでは、週に3回（1授業、通常学級の生徒90分、特殊学級の生徒60分）、同じ学校にある特別支援学級の生徒が参加して健常児と一緒にPsychologyの授業を受ける。通

常学級の生徒は、特別支援学級の生徒が来るまでの30分の時間を使い、今日の授業で行う課題についての話を聞いたり、今後の授業で行う課題について話し合う。この時間、特別支援学級の生徒は特別支援学級で授業を受けている。30分後、特別支援学級の生徒が参加しての授業が始まる。9つの5人グループ（通常学級の生徒4名と特殊学級の生徒1名）に別れて行う。最初に特別支援学級の生徒の発表があり、毎回2名程度が、作文、絵、作品、音楽、歌などを自由に発表する（全員に当たるよう順番になっている）。また、月に1回その月誕生の生徒の誕生会なども行われていた。課題活動では、グループごとに作品を作ったり、手紙を書いたり、絵を描いたり、歌を歌ったり、ダンスを踊ったり、ゲームをしたりなど、さまざまな活動が行われていた。作品を作った時などは、最後に発表が行われた。

F児の場合、課題活動には積極的に参加していたが、言葉が出ないため、発表の時などは教師が代わりに発表していた。また、作文や手紙などを書くときは、教師が下書きした字を上からなぞっていた。終わりの時間が近づくと席を離れるなど、課題に集中できなくなる事があった。また、母親と一緒に参加する事があったが、その時はよく指示がとおっていた。

(b) 3年生クラス

このクラスでは、週に3回（1授業、90分）同じ学校にある特殊学級の生徒1名が参加して一緒にPsychologyの授業を受ける。殆どの授業は、教室ではなく、幼稚園、小学校、中学校、障害者施設、老人ホームなどへ出向いて行われていた。毎回違う所にスクールバスに乗り移動し、最初に説明を受けた後、何人かのグループに分かれ活動する。幼稚園、小学校、中学校では教室に入り、幼児児童生徒の学習支援や活動などを行う。また、障害者施設、老人ホームなどでは、手伝いをしたり、話し相手になったり、介護支援を行ったりしていた。

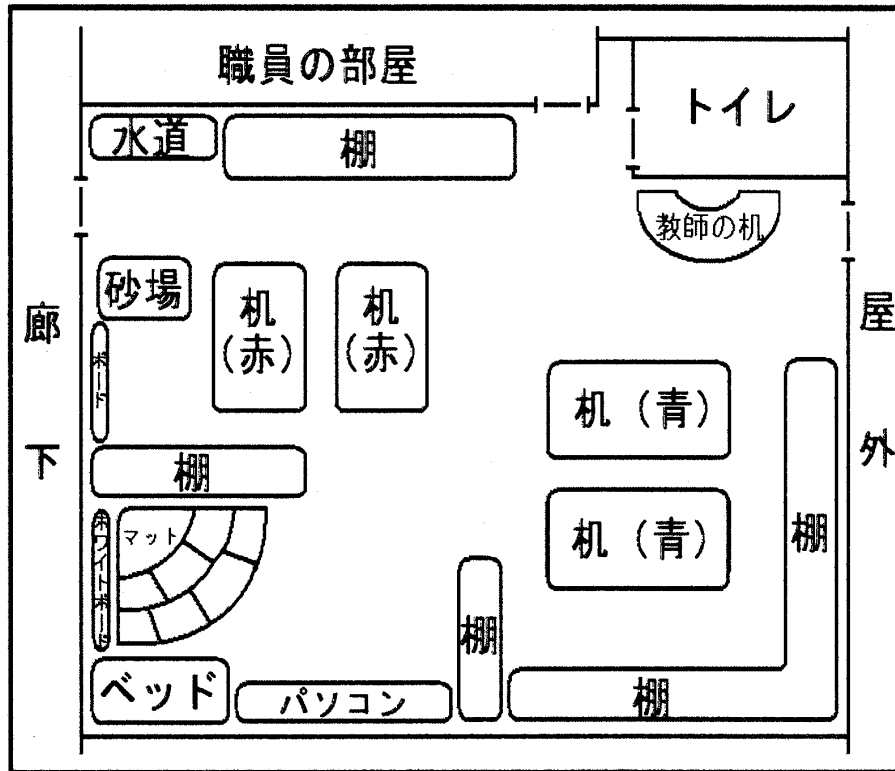
G児の場合、基本的に他の生徒と変わらないように活動に参加していた。小学校などでは、児童に本を読んで聞かせたり、課題の支援（この時は作文の課題）を行っていた。何事にも積極的に行っていた。分からないことがあったときなどは、教師や学生に尋ねたりして解決していた。また、周りの生徒も声かけなどをしたりして補助していた。母親も、毎回授業に支援者として参加していた。

IV 考察

1. Foothills Elementary Schoolでの支援

Foothills Elementary School では、パソコン教材、VOCAなどの教材スイッチ、ブロックやパズルなどの知育教材、絵カードなどのさまざまな教材が取り入れてあったり、学習スペースがとってあったり、親や元教師などのボランティアの学習支援など、個人単位での学習・生活支援が盛んに行われていた。特にLighthouseでは、机の色を変える（学習の時は青色の机、それ以外の活動の時は赤色の机を使う）などの環境整備がなされており、集中力の続かない児童などの学習意欲向上への試みも行われていた。また、支援を行っている教師も児童一人一人のレベルに合わせてながらコミュニケーションをとり、支援を行っていた。しかし、全てにおいて支援すると

いう事ではなく、授業の課題選択、活動、生活などの多くの場面で児童の自己決定・自己選択を尊重し、それを支えながら、積極的な学習・生活に結びつけるような支援が休み時間にわたる全ての時間でなされていた。



Foothills elementary school lighthouse の教室の図

また、Lighthouseの名前の由来について教師に聞いてみると、以下のように話した。

A Lighthouse is ...

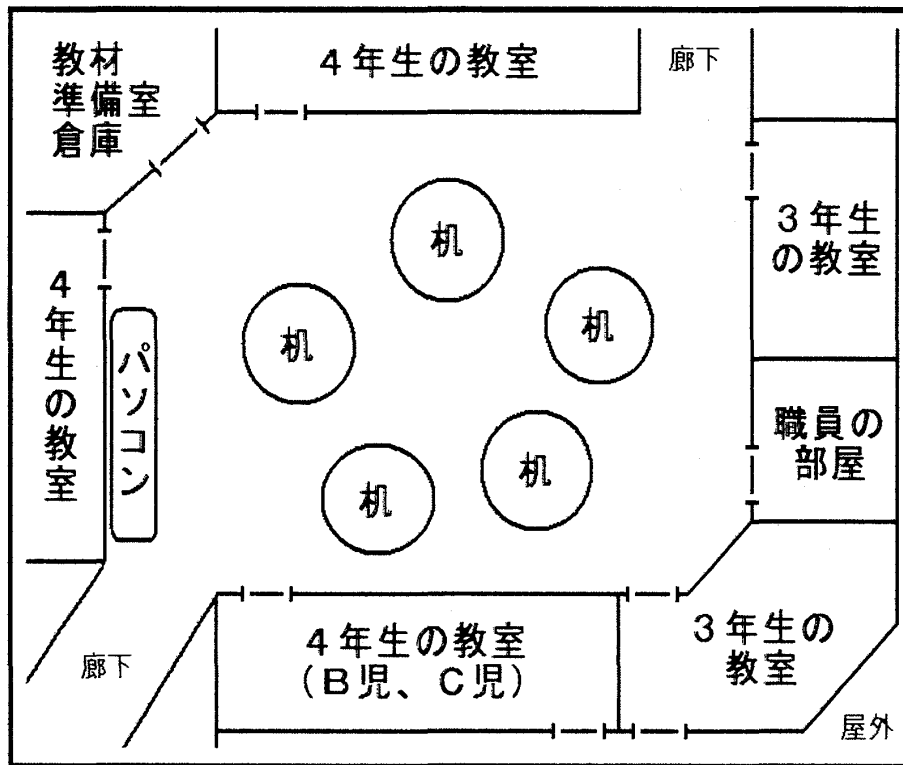
A light in the dark, and a calm in the storm. Sometimes teachers and classrooms can be the light and the calm in a dark and stormy world.

このように、児童たちが社会の中で苦境にたたされても、この学校では明るく輝けるように、「こうしなさい」とその児童の学習や生活を決めてしまうのではなく、児童の自己決定などを大事にした上で、児童が迷い困る事があった時に、その手助け、道標になれるよう心がけ、個別支援を行うことを大切にしていることが示唆された。

また、通常学級で障害児についての授業が行われている場面は見ていないため、通常学級の児童がどれだけ障害について理解しているかは定かではないが、休み時間に一緒に遊んでいる姿を見ていると、児童同士が自然と助け合っている姿が見られ、児童たちの受け入れ姿勢が整っていることも推測された。

また、校舎の作りとして、学習スペースを囲むように教室が配置されており、その広く設けられた学習スペースには専属の教師が配置されており、授業についていけない児童が教室から出ても、その場所で1対1での個別学習支援が行われる支援体制が整備されていることが示唆された。また、そこでは児童の親やボランティアなどによる個別学習支援も行われていた。また、パソコンが各教室に2台、学習スペース6台に置いてあり、いつでも自由に使うことができ、

児童生徒が興味関心を持って打ち込める環境整備がなされていた。

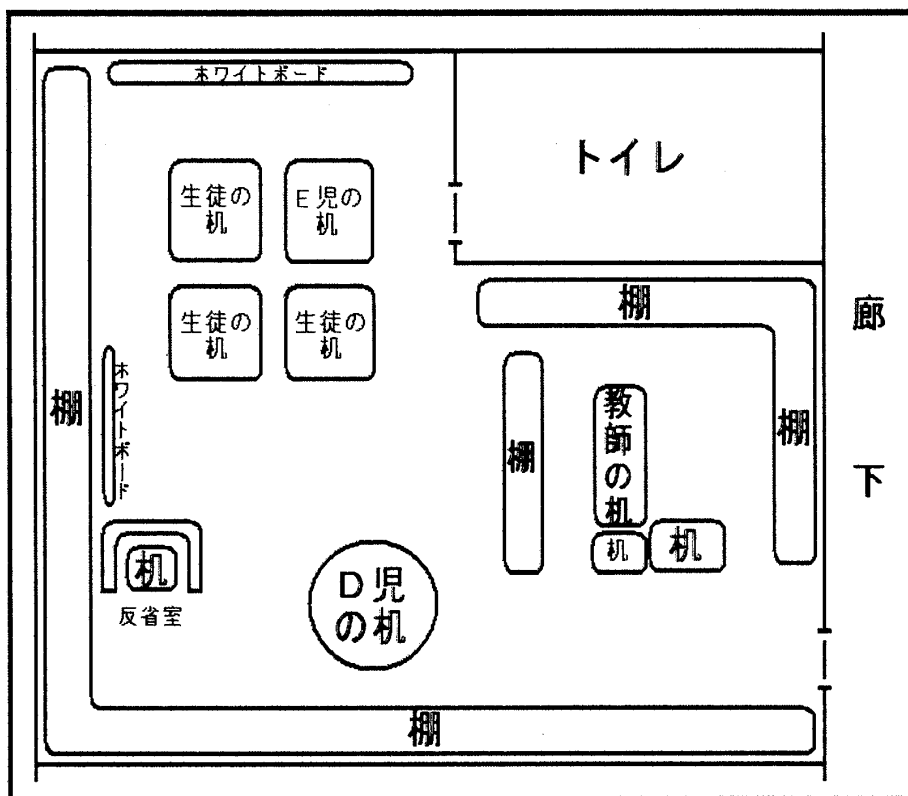


Foothills elementary school の学習スペースの図

2. White River Junior High Schoolでの支援

White River Junior High Schoolでは、Foothills Elementary Schoolとは異なった支援が展開されていた。D児には、常に1対1での支援が行われており、F児含む3人の生徒には1人の教師による支援が行われるなど、対応は様々であった。

また、このクラスには、タイムアウトスペース（兼カームダウンスペース）が設けられていたことから、教師との約束が守れなかった生徒に対しては、自省と心の落ち着きを求めることを重視していることが示唆された。



White river junior high school の特殊学級の教室の図

3. White River High Schoolでの支援

White River High Schoolでは、Psychologyの授業が行われていた。その授業には特別支援学級の生徒も参加し、障害児を含めたグルーピングによる授業が行われることで、健常児が何気なく障害児をサポートしながら、楽しく授業に臨む姿勢づくりの必要性が示唆された。

また、3年生のクラスでは、小学校や老人ホームなどの施設などに出向いていた。卒業後の進路として、簡単な仕事出来る生徒はスーパーなどに就職することも可能なことから、就職支援に結びつく支援が行われることの重要性が汲み取れる。

4. わが国の特別支援教育の在り方の考察

(1) さらなる通常学級での支援体制の整備

すでに特別支援教育体制は全国各地で整備されつつあり、特別支援教育コーディネーターの運用、校内委員会による個別的教育支援計画の整備、学校現行の学級編制においては、概ね30～40人に担任が1名配置される。わが国においても、必要に応じて複数の支援者による支援が展開されているが、通常学級に障害児が在籍した場合の複数の支援者による支援体制については、多くの課題を有している。

たとえば抽出支援の必要性について、文部科学省（2003）の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」や中央教育審議会（2005）の「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」において、「特別支援教室（仮称）」の必要性に言及しているが、一方で、障害児の保護者の願いもあって、現行の障害種別ごとの「固定制」の「特別支援学級」の形態については残すこととなった。その際に、通常学級に在籍する児童生徒で特別な支援が

必要な者を抽出して支援する必要性が生じた場合に、固定制学級に抽出支援を位置づけるのか、教室の確保やFoothills Elementary Schoolのように環境整備を行うのか、専属の担当者を配置するのか、支援者の専門性の向上などの課題を抱えることとなる。今後はこれらを考慮した各学校の現状に合った教員配置や他の支援者の積極的な受け入れなどがさらに必要となろう。

(2) 高等学校での特別支援教育の必要性

White River High Schoolでの支援内容は、高等学校での特別支援教育の在り方に一石を投じているように思える。わが国の高等学校における特別支援学級の設置は、とくに公立学校においては皆無に等しい状況がある。軽度発達障害のある（または疑いのある）生徒は高等学校にも在籍していること、今後も中学校から多くの軽度発達障害のある生徒が高等学校に進学することが予想されることから、高等学校での特別支援教育の体制づくりが急務である。

(3) 教師の専門性を高めるために

先述のアメリカの小中学校では、専門教師が特別支援学級に配置されていた。

わが国の現行の専門の免許状としては、養護学校教諭免許状（盲学校、聾学校教諭免許状を含む）が挙げられるが、特殊教育諸学校における免許状をもつ現職教師の数は、平均で4割に満たない現状がある（文部科学省調査、2003）。また、小中学校特別支援学級の担当教師の免許の保有率においても同様の現状がある。

このことは、教員採用試験において、小学校、中学校、高等学校の採用枠で受験した合格者が、専門の免許を持たずに盲・聾・養護学校に着任して障害のある幼児児童生徒の支援を行ったり、人事異動やクラス編成の際に専門の免許状を持たない教師が特別支援学級を任されるケースがあることなどからも明らかである（河田、2005）。文部科学省は次年度からの特別支援学校の教諭になる者について、特別支援教育（特殊教育を含む）免許状を持たなくても特別支援学校の教諭になることができる現行の特例措置について、50余年ぶりに改正する方向にある（朝日新聞、2005年5月15日記事）。

一方、盲・聾・養護学校教諭免許状（特別支援学校教諭免許状）を持たない教師が履修した養成カリキュラムにおいては、障害児の教育・心理に関する部分に触れるのは「教育心理学の一部」と「介護等体験の一部」が主要なもので、それ以外の専門科目の履修体系は作られていないことから、履修カリキュラムに障害児の心理や指導法等特別支援教育に関する科目の一部を教職必修科目とすることなども検討する必要があるだろう。

また、小中学校では、近年、障害児支援の種々の研修会に積極的に参加したり、校内研修の機会を増やしたり、担当教師に認定講習受講や国内留学による免許状取得を促しているが、担任教師がクラスの当該児童生徒に気づくことや当該児童生徒の困り感に寄り添うに至っていない教師が未だに多い現状にあることから、現職教員の研修について、特別支援教育に関する一層の取り組みが早急に行われる必要があるだろう。

(4) さらなる補助的支援者の確保のために

先述のように、わが国においても、種々の補助的支援者の確保が展開されつつあるが、教員免許状をもつ者の活用については有償であることが一般的であるのに対して、学生の活用等においてはいわゆるボランティアであるものが多い。加えて、都心部での支援者確保は比較的容易であるが、遠隔地での支援者確保は厳しい現状にあることから、支援者確保のための地域開放講座を開講したり、学校までの交通費等の支給を検討するなどの措置が必要であろう。

文 献

- バーズ亀山静子 (2002) : LD教育を拓げるために—アメリカの実践: その理念・方法・成果・課題—. 日本LD学会第11回大会発表論文集、pp2-3.
- 中央教育審議会 (2005) : 特別支援教育を推進するための制度の在り方について (答申).
- 海老坂武 (1997) : 教育をどうする. 25、岩波書店.
- 松見淳子・道城裕貴 (2004) : LD等への特別支援事業の実態と大学の連携. 神戸市小学校長会編: 続変容する子どもたち. みるめ書房、pp47-67.
- マーク・セリコウィッツ (2000) 注意欠陥多動性障害 (ADHD) の子どもたち. 中根晃・山田佐登留訳、金剛出版.
- 文部科学省 (2002) 障害のある児童生徒の就学について (通知).
- 文部科学省 (2003) 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告).
- 長尾秀夫 (2003) : 注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) 児の教育支援—一斉授業における補助教員のあり方—. 発達障害研究、25、pp99-108.
- 河田将一 (1998) : 個別教育計画における親支援のあり方についての一考察. 熊本大学大学院教育学研究科修士論文 (未刊行).
- 河田将一 (2005) : 「特別支援教育Q&A」. 下司昌一・砥柄敬三編 特別支援教育をどう進め、どう取り組むか. pp240-249、ぎょうせい.
- 河田将一・森敦・一門恵子・緒方明 (2005) : 通常学級における学生ボランティアによる反抗挑戦性障害を伴ったAD/HD児への支援. LD研究、14(2)、pp124-133.
- 熊本県総務部財政課 (2001) : 平成13年2月熊本県定例議会提出予定議案書説明資料.
- 熊本市教育委員会指導課 (2006) 「学級支援員」について. 平成18年度第3回熊本市療育ネットワーク連絡会実務者会議資料.
- 熊本市教育センター (2001) : 熊本市教育センター教育相談部案内.
- 拓植雅義 (1999) 南カリフォルニアのコミュニティカレッジ・大学における学習障害へのサポートの状況. 日本LD学会第8回大会発表論文集、pp72-75.
- 拓植雅義 (2004) 学習者の多様なニーズと教育政策. 勁草書房.

注

- 1 本学2002年度卒業生